

## 「快適な着装」に関する一考察

—大学生の着衣に対する考え方を参考にして—

天 木 桂 子\*

(2003年3月20日受理)

Keiko AMAKI

Introduction to Guidelines of "Dressing for Comfortable"

—An Analysis of opinions about the costume of University Students—

### 1. はじめに

高等学校を卒業して大学生になった時、その実感とともに戸惑いを感じるものの一つに服装が自由になったことが挙げられるだろう。それまで、ほぼ全員が中学校からの約6年間、それぞれの学校が指定する制服(標準服と呼ぶ場合もある)を着用して生活時間の多くを過ごしてきた学生たちにとって、突然決められた服がなくなったことは、生活的にも心理的にも大きな環境の変化といえてよい。まず、どこへ行くのにも何を着るか自分で考えなければならなくなった。それまでは、登校する服は決まっているため、毎朝何も考えず制服を機械的に着ていればよかった。季節の変わり目である夏服と冬服の切り替えも、6月1日と10月1日の衣替えの日に決まっておき、その日を境にして街を行き交う中高生の服装は一変する。しかし、大学生になると毎朝学校へ行くための服を選ばなくてはならず、これはそれまでの生活にはほとんどなかった新しいステップである。制服のなかった小学生の頃は親や家の人が服を選んでくれていた場合も多く、多くは大学生になって本当に自由な服を着られる環境をはじめて得たと考えてよいだろう。

本報は、こうした大学生の日常の着衣に対する考え方を調査し、日常の衣服を選ぶ視点をどこにしているかを探った。また、書かれた意見を参考にしながら、そもそも「快適な着装」とは何か、それは時、場所、状況(TPO)によってどう変化するのかを明らかにし、豊かな衣生活への手がかりを得ることを目的とした。

### 2. 着装に関する調査

#### 2.1 調査時期および対象者

2000年2月から2002年7月にかけて、岩手大学教育学部の3-4年次学生57名(女子48名、男子9

---

\*岩手大学教育学部

名、ほぼ全員が家政教育講座所属学生) に対し、以下に示す質問を提示し、自由記述させた。回収数は57 (回収率100%) である。

## 2.2 調査内容

内容は、被服を着用することでもたらされる快適感や不快感についてである。得られた回答をもとに、大学生が考える「着装」に関する考え方、興味の程度を探った。

質問を以下に示す。

(質問) 快適な着装の意味

快適な着装について、「身体的快適さ」と「心理的快適さ」の両方を考慮しながら、どんな場面でどちらを優先させるべきなのか、あなたの考えを述べてください。また、あなたにとって快適な着装とはどういう状態を指すのか述べてください。合わせて、これまでの経験から快適な着装だったといえる体験があれば挙げてください。

## 3. 結果および考察

### 3.1 着衣の目的

ヒトが衣服を身につける目的、機能にはいろいろあるが、「自然環境への対応」と「社会環境からの要請」の2点から考えなければならない。

「自然環境への対応」という点で、最も基本的なこととして挙げられるのが「保健衛生上の機能」と呼ばれるものである。これは気候、気温、湿度、天気といったまわりの温熱環境から身を守るために衣服を着用することで、簡単に言うと、寒いときには暖かく、暑いときには涼しく、日差しの強いときは日光を避けるような着こなしである。また、「生活活動上の機能」と呼ばれるものは、作業や運動をしやすくしたり、さまざまな危険から身体を守るために着用することで、動作を妨げず動きやすくしたり、時には記録を向上させるために身につけるスポーツウエア、各種作業着、熱から身を守る消防服などの特殊機能を備えた衣服、けがや寒さに備えた登山服などが挙げられる。

一方、「社会環境からの要請」のうち「社会生活上の機能」と呼ばれるものは、社交、儀礼、標識として重要な役割をもつもので、社会生活の場においてその場にふさわしく、人との交わりを円滑にするためや、警察官の制服に代表されるように、その人の所属が他の人にわかることを目的とした着用である。学校の制服もこれに当てはまる。さらに「装身上の機能」と呼ばれるものがあり、身体を着飾り、個性や美意識を表現するため、自身を効果的に演出することを目的として衣服を着用することである。その他に「扮飾擬態上の機能」と呼ばれるものとして、舞台、舞踊衣装や仮装、変装衣装などがある。

これらの機能は、すべて「快適さを得る」ことを目的としている点で一致する。しかし、その快適さの対象は、前者の「保健衛生上、生活活動上の機能」は「身体的快適さ」であり、後者の「社会生活上、装身上の機能」は「心理的快適さ」で、2つに大別されるところを考えるとよい。すなわち、衣服の着用には必ず「身体的快適さ」と「心理的快適さ」の両方が同時に関わっており、個々の場面の状況によってどちらを優先させるべきかを常に着用者自身が考える必要がある。場合によっては、身体的快適さを犠牲にしてでも心理的快適さを優先させたり(例えば夏の日の葬儀)、心理的快適さを無視してでも身体的快適さを第1に考えなければならない(例えば冬山登山) こともある。従って、常に快適な着用を意識しながら豊かな衣生活を送るためには、どちらを優先させるべきかを考えて、よりふさわしい判断ができる能力を身につけていなくてはならないと言えよう。(なお、「身体的快適さ」およ

び「心理的快適さ」は、筆者の命名による。) <sup>1)</sup>

### 3.2 快適な着装の意味 (質問の回答より)

「身体的快適さ」と「心理的快適さ」のバランスを常に考慮しながら、着用する衣服を選ぶ必要性は前述したが、具体的にはどういうことであろうか。

例えば朝学校や仕事に行くための衣服を選ぶ場面を想定する。今日の天気はどうか、気温は何度まで上がりそうかなどは、「身体的快適さ」のための要因である。また、今日一日のスケジュールを思いめぐらし、午前中は大学で講義を受講するが、午後にはスポーツを予定している、就職説明会のようなあらたまった席に出なければならぬ、友達とショッピングに出かけるという場合は、その状況を見越して「心理的快適さ」のためにそれにふさわしい服装を選ぶだろう。

次に、3.1で述べた「身体的快適さ」と「心理的快適さ」についての具体例や、意見、これまでの経験を聞いた。アンケートからいくつか意見を挙げる。

#### 3.2.1 「身体的快適さ」を演出する要因

学生たちが考える自分にとっての「身体的快適さ」とはどういう場合か。様々な回答が得られたが、大きく分けると次の4点にまとめられる。言いかえると、以下の4点が「身体的快適さ」を左右する要因であると解釈できる。

1点目で最も多かったのは、気温や湿度などその日の天候や環境を考慮して衣服を選ぶという、衣服の着こなし、組み合わせに関する要因である。

2点目は、肌触り、皮膚への感触がよいなど、衣服の素材に関する要因である。

3点目は、着用していて楽である、動きやすいなど、衣服の形状に関する要因である。

4点目は、きつくないか、自分に合っているかというサイズに関する要因である。

それぞれについて具体的回答を挙げる。以下の「・」で始まる部分は回答、意見である。一部筆者の判断で省略してある。

1点めの環境を考慮して服を選ぶとは、衣服内気候を快適ゾーン (一般的な解釈として最内層が $32 \pm 1^\circ\text{C}$ ,  $50 \pm 10\%$ , 無風に保たれている状態をいう) に保ちたいという要求、またはそのような衣服内気候が得られたときに快適だとするものである。衣服内気候を整えるとは、一言でいうと「寒いときには暖かく、暑いときには涼しく着こなす」ことで、これについては実に約80%の45名が言及していた。

- ・ 私が日頃気をつけている身体的快適さは、冬の寒さ、夏の暑さに対処し、やわらげることだと思う。特に盛岡は夏は暑く、冬は非常に寒いので、季節に対応した着装は大切だと思う。私は、暑さも寒さも人よりも敏感で弱いので冬は特に何枚も重ね着します。
- ・ 快適な着装とは、気温、気湿、気流、放射熱などの環境に応じて衣服内気候を適切に行うものであると考える。冬は保温性がその第1条件であり、いかに空気を逃さずに暖かく着るかが問題である。具体的には含気量が多い、厚地、組織が密なもので、被覆面積を大きくし、開口部を閉じる、重ね着をするなどである。
- ・ 私は特に汗をかきやすい体質なので、吸水性がよく、通気性にも優れた被服が身体的に快適だと感じる。また、冷え性でもあるので、下半身を覆う被服はできるだけ面積の広いもので、保温性に

優れた暖かいものが快適だと考える。

- ・ 暑いときには涼しく、寒いときには暖かく感じられる被服である。特に私は寒がり冷え性なので、冬は特に被服に気を遣い、下着（通称パジャマ）は必ず着用している。また、手袋を着用するなどしてできるだけ肌の露出を少なくするようにしている。

これらは代表的なものであるが、特に目立ったのは、寒い冬の着こなしに関する記述で、暑い夏の着こなしに触れたものはわずかだったことを考慮すると、この地域の服装は夏より冬の寒さへの対処が第1と位置づけ、「保温性」をキーワードとして常に心の中で意識していることが読みとれた。冷え性を自覚する者も少なくなく、靴下や下着を工夫して冬に対応している様子がかがえる。そのほかに少数だったが、4名が汗をかいたときや雨の日のムレ感、べたつき感に触れ、湿度の調整（いずれも夏を意識した記述であった）を挙げていた。

2点めの肌触り、皮膚への感触のよいものを着用したときについては、約20%の11名が挙げていた。1点目と異なり、これまで経験した不快感の例を挙げて快適さを記述する回答が目立った。

- ・ 衣服の肌触りは快不快に関わる。特に下着は直接肌に触れるものなので、ごわごわしたものやざらつくものなどは、精神的ストレスに結びつく。また、静電気のパチパチ感もかなり不快である。
- ・ 布の種類として刺激の少ないものが好ましい。私は皮膚があまり強くないので、ウールが直接肌にあるとかゆくなってしまう。だから綿などの素材がよいと思う。
- ・ 綿のようにさらさらしたやわらかい衣服が快適だと感じる。
- ・ 下着や洋服について、肌触りのいいものが快適だと感じる。モヘアのセーターを以前買ったことがあるけれど、チクチクして一日中気になるし、首が赤くなったりして私には合わなかった。それ以来、いくら形がかわいくてもモヘアなどは買わないようにしている。
- ・ 私は下着の素材について、快適なもの和不快なものがはっきりしている。快適だと思うのは綿で、着て就寝するとよく眠った気がする。肌触りもゴワゴワ感がなく、柔らかい感じのものだし、すぐ就寝するときは快適だと思う。でも、綿の下着はデザイン性に富んでいないので残念だ。
- ・ ゴワゴワした下着よりも、ふんわりとした下着の方が快適だと感じるので、(洗濯時に)柔軟剤などを入れた方がよい。

これらを見ると、特に毛に代表される素材のチクチク感や、静電気のパチパチ感が不快であるとの回答が目立った。また、肌に直接身につける下着についての記述が比較的多く、刺激がなく優しい肌触りが快適さだと指摘している。そのための最もふさわしい素材は、天然繊維の綿だと考えているが、回答にもあったように、デザインの満足するものがないなど、綿の下着に対してあまりいいイメージを持っていないことがわかる。これは、あとで述べる「心理的快適さ」とも大いに関わる部分である。

3点めの着用していて楽であり、動きやすいことが快適さの要因である、という回答は約半数の28名で、いずれも何らかの例を挙げて記述していた。

- ・ 私にとってはやはり着ていて楽に感じるものだ。だいたい服と身体の間ゆとりがあって、伸

縮性がよく、肌触りのよいもので、家でよく着ているジャージやパジャマといったものがそれにあたる。

- ・ 身体的に快適な服はジャージです。あまりしめつけがないし、ゆとりがあって、伸縮性もあり、着脱も楽だからです。
- ・ 身体的にはしめつけのないもの、ゆったりしているもので、一番快適であったと感じたものはパジャマである。パジャマを着ているということで、ゆっくりのんびりできると思える。
- ・ 身体的快適さを優先させるのは寝るとき、長時間乗り物に乗らなければならないときである。
- ・ 私は家にひとりでいるときよくパジャマを着ているが、とても着心地がよく楽で気持ちのよい気分でいられる。

これらは、くつろいでいるときには楽な服装でいたい、とする意見である。ジャージやパジャマが具体例として多く挙げられており、着ていることを意識させないものが快適さにつながっていると解釈できる。

- ・ 自分にとっていかに動きやすく、体に負担がなく、気持ち的にリラックスできるかが大切である。
- ・ 例えば、運動するときには運動着を着る。伸縮性があって動きやすいからである。
- ・ 行動や仕事に適した衣服を着るときは、身体的快適さが優先されると思う。
- ・ 運動するとき、外で草むしりなどの作業をするとき、山登りをするときなどの場面では、人目を気にすることなく、動きやすさを重視したり、汚れてもいいものを着ようとする。
- ・ スポーツや力作業をするときなど激しい動きが求められるときは身体的快適さを重視したい。

これらは、スポーツや作業時などある特定の場面について、その行動がしやすいように、動きを妨げないようにサポートしてくれる衣服が身体的に快適だとする意見である。キーワードは「動きやすい」であるが、それだけならば何も着なくてもいいと言える。しかしここでは、その衣服が身体を守る、安全を保障することも快適さの要因になることを示している。

4点めはサイズについてである。記述していたのは約15%の8名であった。

- ・ 身体的に快適な被服とは、まず自分の体のサイズに合ったものだと思う。例えば、無理をしてワンサイズ小さいものを着用したとすると、やはり窮屈だし体のラインもきれいに出ないと思う。
- ・ サイズの合っていない被服はやっぱりどこかしら窮屈で不快な感じがする。サイズはかなり大切なポイントだと思う。
- ・ サイズ的にも余裕のある被服がよいと思う。
- ・ きつい下着を着たり、小さな靴を履いたとき、またはその逆の場合も、自分の体に合ったものを身につけないと不快な気分になる。

このように、ほとんどが無理をしてサイズの小さいもの、きついものを身につけたときの不快感を伴った経験を挙げて回答していた。特に女性の場合（もちろん男性にもあるが）、実際のサイズよりも小さめの被服を身につけたい心理的要因が働く場合があり、これが身体的負担を生じさせて結果的に快適さを損ない、後悔につながることを示している。また、衣服そのものでなく靴を挙げた回答はこ

こだけで、靴のサイズの不適合は靴ずれやまめなどをもたらし、痛い思いをすることが多いため、不快な記憶として残りやすいと解釈できる。

以上をまとめると、「身体的快適さ」は、まわりの自然環境と着用者自身の体質、その日の体調との間にうまく折り合いをつけることで得られると言ってよいだろう。両者を関係づけた上で、被服という主役を選択することになる。つまり、対象となるヒトは自分自身のみの場合が多く、他人はあまり意識されないのが特徴といえる。この時正しい選択をするためには、素材の保温性、通気性についてや、重ね着が暖かさに有効であることなど、繊維や布、着方に関する知識がある程度必要である。それにはこれまでの経験（特に失敗の経験）とともに、家庭科の被服領域などで学習した知識が大いに大切になってくると考えられる。

### 3.2.2 「心理的快適さ」を演出する要因

学生たちが考える自分にとっての「心理的快適さ」とはどういう場合だろうか。この場合は被服を自分のみを守るための道具ではなく、自身を演出するファッションとしてとらえている場合が多い。ここでは必ず自分以外の他人の存在が不可欠で、「見られている」「見てもらいたい」「見せたい」対象者が、着用者の被服の選択に大いに影響を及ぼす。

得られた回答を大きく分けると次の3点にまとめられる。

1点目は、その場にふさわしい服装をすることである。突飛な服装でなく、雰囲気になじみ、心理的に安心感をもたらす服装といえる。このときは、目立たずその場にとけ込むことで他人に意識されないことが重要なポイントとなる場合が多い。

2点目は、装身を目的とした服装である。これは自分自身を美しく演出するための着こなしであるため、他人に見せることがポイントとなる。従って他人の評価を常に意識して求めており、他人に意識されなければ意味を持たない。

3点目は、自分が気に入った色や形の服を着て、心理的に楽しさや満足感を得ることを目的としたもので、主として自分自身に意識が向けられている。これは、他人の評価を気にする場合もあるが、どちらかというとき自己満足感によって心理的快適さを得る例と言える。

1点目についていくつか例を挙げる。これについては約46%の26名が言及していた。

- ・ 暑い時でもお葬式があったら全身黒でなければならない。これは身体的には非常に不快である。しかし、周囲の人々と同じ服装をしているという点で、心理的には快適な状態である。
- ・ たとえば、法事などでは黒い背広を着る。ひとり黒でないというのは私にとって気分の良いものではない。
- ・ 結婚式やパーティのようなみんなが着飾って集まるようなところでは、Tシャツやジーンズでは失礼にあたると思うので、その場においても恥ずかしくないような服装にする。楽しいはずのパーティも楽しくなくなってしまうたり、その場にいられない状態になるかもしれないので。
- ・ 公式な場所や、面接、年上の方と会うときなどは、TPOをわきまえて、ひとりよがりのファッションにならないようにするべきだ。
- ・ 公の場に出るとき、ある程度その場にあった服装をしなければ、心理的ダメージを受ける。

これらは、まわりの状況に自分を合わせて着こなすことに意味がある。いわゆる「TPO」がキーワードであり、これを間違えると、かなりの心理的不快感をもたらすことが挙げられている。この場合は、たとえ自分に似合わなくても、嫌いな色やデザインであっても着用しなければならないこともあり、一つの心理的快適さを得るために、別の心理的快適さを犠牲にする。また、夏のお葬式のように、身体的快適さを犠牲にしてでも心理的安心感を得ることが重要な場合があり、いわゆる「常識、約束事、暗黙の了解（あくまで所属する社会にのみ通じる約束事であり、別の集団では別の約束事がある）」とされることが服装を支配する典型的な例であろう。また、公式な場、商談、面接などでも、ある程度常識の範囲内での服装が求められ、スムーズな人間関係の形成に服装が大きく役立っていることを示す例である。

2点目についていくつか例を挙げる。約20%の11名が記述していた。

- ・ 心理的快適さとは、人にどう見られたか、どう見られたら困るかなどを抜きには得られない快適さだと思う。やはり他人に好感を持ってみられるかどうかが大切である。
- ・ 私は人目が気になるので、あまり奇抜でないものがよい。
- ・ 人から見ていいと思われるような着用在いいと思う。やはり人に「その服かわいい」とか「似合ってる」と言われるとうれしいと思う。
- ・ 誰かに注目されたり、ほめてもらったりすれば心理的快適さはぐっとアップすると思う。
- ・ 「かっこよさ」や「細く見えるかどうか」を考慮する。例えば、ヒールの高い靴や幅の細い靴をはくこともあり、健康にはよくないかもしれないが、心理的には十分に満たされる。
- ・ 何かのパーティの時などは結構無理して薄着をしたり足に負担がかかる靴も履く。これらは身体的には快適でないが、見られることで気分がよい。
- ・ 例えば恋人ができるとなんかうれしくて、そして相手によく見られたくてステキなものを身につける。また、泊まりで旅行するときは、朝から自分が一番よく見えると思うものを着ていく。たとえ寒くても、身体的快適さをほとんど無視してお気に入りさらっと着こなす。

はじめの2例は、特に積極的な装身を目的としておらず、現実の自分よりマイナスに見られないことを意識して服を選ぶとする回答である。1点目と同じく、安心感も含まれる要素である。

後半は、積極的に装身を考えた着装で、現実の自分よりプラスに見せることが目的となっており、少しでもより良く見せたいという心理が働いて、服装の選択に大きな影響をもたらす。この場合は多少のことは犠牲にしてでも自分を飾ることが大切で、ある程度の我慢さえも快く受け入れてしまう。さらに自分の考え通りに他人からほめられると、いっそう心理的快適さは増し、それが自信となって次へ結びついていく。特に最後の例にあるように、恋人など、一番自分をよく評価してもらいたい人が対象になる場合（この例は女性の回答）は、装身を目的とした着用在最もピークになる例だと考えられる。

3点目についていくつか例を挙げる。約61%の35名と多くの回答が得られた。2点目と異なり、他人ではなく自分を対象とした装身が目的である。

- ・ 快適な被服とは、着たり身につけたときに、自分で自分がよく見えるものである。

- ・ なんとと言っても気に入って買った服や、ずっとほしかった服を手に入れてその服に合わせておしゃれをすると心が弾みます。
- ・ その服を着ることで明るく楽しい気分になれる服、服は自己表現の手段の一つだと思う。快適な被服とは、他人から見てどうこうと言うよりも、自分自身が着ていていい気分になれる服である。
- ・ 自分の好きな色、好きなデザインの服、いわゆるお気に入りのものを身につけているときはなんだか気分がいい。
- ・ 例えば、春になれば何となく気分がウキウキして春色（ピンクや水色などのパステルカラー）を好んで身につける。
- ・ ちょっとくらいウエストがきつなくても、その服のかわいさに負けて買ってしまうこともある。
- ・ 少しきつめのスカートや靴は我慢しても自分が満足する格好をしたいと思う。
- ・ 快適な服装とは、着ることで心理的に安定するもの。だから寒くてももう1枚着ることで全体のバランスが悪くなるようなら着ないで我慢するし、ちょっと小さくてもそれが気に入ったら、いろいろと努力して着てしまう。

ここで多くの回答に見られたのは、服装と気分が非常に関連していると意識しているものである。気に入った服装がいい気分をもたらす例と、気分がいいのでそれにふさわしい服を着たくなる例の両方が挙げられているが、いずれも服を着ることを自己表現（心理表現）ととらえている点で共通している。これは言いかえると、気分が落ち込んでいるときは、明るくはなやかな服を着ることで少しでも元気になり、気分転換をはかれる可能性があることを示している。

最後の3つの例は、サイズに触れたもので、いずれも女性の回答である。前述した身体的快適さのところで、合わないサイズが身体的快適さを損なう例を挙げたが、ここでは、多少サイズが合わなくても気に入ったものなら心理的満足感をもたらすと回答している。やはりここでも我慢することに対する抵抗感があまりなく、身体的な快適さより重要な因子であることが示されている。

最後に、特徴のある回答を2つ示す。

- ・ 快適な被服とは、気持ち的にリラックスできるかが大切である。おしゃれは気持ちを華やかにしてくれて大切であると考えるが、自分の中身を考えて行き過ぎは落ち着かなくなり逆に不安定になってしまうので、時と場合と自分自身を考えていくことが大切であると考える。
- ・ スポーツをするときには、運動着を着ることにより、運動をするぞという気持ちにさせたり、チームなどで揃えたときには、団結力もわいてくるなどの心理的な気分を得ることができる。

最初の回答は、おしゃれは気分を良くするが、自分らしさ以上にして無理をすると、かえって心理的に快適さから遠のくので、ほどほどにすべきだとの意見である。このことは、日頃から本来の自分をよく知っておくことが大切であることを意味している。

2番目の意見は、スポーツにふさわしい服装をすることで、自身の気分も高められるが、皆で揃えることが団結感という新しい心理的効果を生み出すとの解釈である。

両者とも、着衣の持つ意味が日常生活の様々な場面に影響し、着方次第ではその効果が正にも負にもなりうることを示唆しており、非常に興味深い回答である。

### 3.3 「快適な着装だった」と思う体験

最後に、これまでの経験から快適だったと思う体験を挙げてもらった。

多かった例は、特別な日に着た服の体験である。例えば、成人式で着た振り袖、夏の浴衣、アルバイトで着た巫女さんの衣装、パーティなどで着た大人っぽいワンピース、ピアノの発表会で着たかわいいドレス、などであった。成人式の振り袖は比較的多くの人が挙げており、身体的には少しきつかったり苦しかったと述べながらも、心理的に非常に快適だったとしている。これを含めて和服に関する思い出が挙げられたことは、通常の服装とは異なる、非日常的な特別な服装が、心理的效果をもたらした、記憶にも長く残ったことを示している。大人っぽいワンピースなども、これまでにはない経験をしたことで、よい記憶として心に残ったと考えられる。いつもと違う服装をすることで、いつもと違う気分になったり、新しい自分を発見したりする機会となり、心理的快適さをもたらした例であろう。

身体的快適さに関する体験も、少数だがいくつかあり、暖かい冬のコート、防水性に富んだスキーウェア、寒さもムレも感じなかったスノボジャケットなどが挙げられていた。いずれも、寒いと思っていたがとても心地よかったなど、意外に快適だったという驚きが強印象を残したと判断できる。やはりここでも、非日常的な着衣に関する回答が目立った。

このように、これまでの体験を振り返ってもらくと、回答としてあげられるのは、印象に残りやすい場面であった。ここで和服の例が多く挙げたのには意外さを感じたが、ある程度気持ちも理解できる。前述したように、いつもと違う自分を演出した経験として記憶されており、これが毎日和服で過ごすことになればまた別の印象を持つことは容易に想像できる。成人式の振り袖などは、この日のための舞台衣装の役割を果たしたと言える。「心理的快適さ」の典型的例と言ってよいであろう。

## 4. まとめ

以上のように、快適な着装に関わる要因を「身体的快適さ」と「心理的快適さ」の2点から挙げたが、どの場面でもどちらをより優先させるのかを、ある程度しっかりと区別している回答が多かった。また、衣服を選ぶにあたって、自分との関わりと他人との関わりの両方が重要であることも認識されており、自分のためだけに着こなす場合、その着装が他人にも影響を与える場合、また、他人を経由して自分に再び返ってくるなど様々な場合があることが挙げられていた。

これまで学校現場で学習してきた被服の着方に関する部分は、そのほとんどが暖かい着方に代表される「身体的快適さ」に関するものだった。しかし、今回の回答を見ると、現在の衣生活を左右しているのは「心理的快適さ」の部分が多く、時には身体的快適さ以上の意味を持つことが示唆された。この点を考慮すると、学校での着方の学習内容を、現実に合わせて練り直す必要性を感じた。着衣の基本的な機能としての「身体的快適さ」の獲得は、繊維や布に関する内容も含めて、基本知識として非常に大切であり、ぜひ学習させたい題材である。しかし、そうした基本的知識をふまえて、さらに発展させた「自分の着こなし」について学ぶ場面を設定することが、学校での学習と現実の衣生活とのギャップを多少なりとも埋めるきっかけになり、より被服に関心を持ち、快適で豊かな衣生活につなげる手段の一つになると期待できる。

### 参考文献

- 1) 天木桂子：東北家庭科教育研究，1号，25-33（2002）